

A年三位一体主日・聖霊降臨後第1主日 2026年5月31日 奈良基督教会聖餐式説教

<創世記 1:1-2:3、II コリ 13:11-13、マタイ 28:16-20>

「創造から終わりまで」副牧師 司祭古本みさ

今日は、先週の聖霊降臨日の後にくる日曜日、「三位一体主日」と呼ばれる日です。一般的には「さんみいったい」と読まれることが多いですが、聖公会では伝統的に「さんいいったい」と敢えて呼んでいます。これは、今日の聖歌に「みつにいましてひとつなる」とあるように、神さまというお方は「父」と「子」と「聖霊」という三つであって、同時に一つなんだよという意味を持っています。

しかし、これがどういうことなのかを説明しすぎると、かえってわけがわからなくなってしまいます。というよりも、神さまという存在を完璧に説明することなど、私たち人間には到底不可能なのです。もしも人間に説明し尽くせる神さまであるならば、それは人間が自分の頭の中で作り出した「都合のよい偶像」になってしまうでしょう。4世紀の偉大な神学者アウグスティヌスは、このように言っています。「我々が理解できるようなものは、神ではない。」三位一体主日とは、神さまを頭で理解しようと分析する日ではありません。そうではなく、私たち人間の小さな知性には到底理解し尽くせないほどに大きな神さまの前に身を置き、その偉大さをただただ礼拝する日なのです。

本日の聖書日課に目を留めると、もう読むだけで胸がいっぱいになります。旧約聖書は、聖書のまさに冒頭である「天地創造」のダイナミックな物語です。そして福音書は、マタイによる福音書の「エンディング（結び）」の場面が選ばれています。この世界が始まる前からおられ、全世界をお創りになった大いなる神さまが、やがて人間の歴史の中に御子イエス・キリストとして歩まれ、そして最後にこう約束してくださるのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」

ここに出てくるイエス様は、十字架につけられて死んで、三日目に復活されたイエス様です。これから天に昇られるというときに、弟子たちにこの力強い言葉を残されました。そしてこの約束は、私たちに「聖霊」が送られたことによって、今も完全に実現しています。

天地創造の初めからおられる神さまが、時空を超えて、今もずーっと私たちと共におられる。この壮大な救いの図は、私たちに何を示しているのでしょうか。一つは、この世界、そして私たちの人生は決して偶然の産物ではなく、神さまの確かなご計画であるということです。そう聞くと、もしかしたら私たちは神さまの大きな箱庭に置かれた、意思を持たない小さな人形のように感じてしまうかもしれません。しかし、聖書が語る真実はそれだけではありません。最も大切なことは、神さまが私たちひとり一人を、かけがえのない存在として愛し、大切に思ってくださっているということです。

今日の創世記第1章で、神さまは光や海、空や大地、植物や動物など、天地のすべてを造られました。そして、すべてが美しく出来上がった最後に人間を造られます。人間が置かれたその世界は本当に美しく、神さまご自身が深く喜び、満足なさいました。創世記1章31節にはこう書かれています。

「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」「極めて良い」。それは聖書における最上級の言葉です。神さまの創造には、何一つ失敗作はありません。そしてこの「極めて良かった」という全肯定の眼差しは、今を生きる私たちひとり一人にも、そのまま向けられています。ありのままのあなたが、そのまま愛され、価値があるのだと神さまは言われているのです。私たちは日常生活の中で、すぐに周り自分と自分を比べてしまいます。「あの人に比べて自分はダメだ」「なんの役にも立っていない」「生きている意味があるのだろうか」と落ち込んでしまうこともあります。

しかし、決してそうではありません。たとえ何かが上手にできなくても、生まれた環境や外見がどうであれ関係なく、あなたは価値があります。神さまの目には、この上なく尊く、愛されるべき存在として、私たちはこの世に生を受けました。

しかし、人間は時にその愛が分からなくなり、神さまから離れてしまいます。「神さまなんていなくても、自分の人生は自分でコントロールできる」と高慢になり、樂園の中で「食べてはならない」と言われていた果実を取って食べてしまうのです。そこから、私たちは神さまとの関係にヒビを入れてしまいました。それでも、神さまは私たちに対する愛をあきらめきれませんでした。「まだずっと大切に思っているよ」「私のもとへ戻っておいで」という一心で、神さまは自ら小さな赤ちゃんとなって、貧しい馬小屋に生まれてくださいました。それが、子なる神、イエス・キリストです。イエス様は暗闇の中にいる私たちの友となり、最後は私たちの身代わりとなって十字架の死を引き受けてくださいました。そして復活し、天に帰られた後、私たちに「聖霊」をプレゼントしてくださいました。もしも神さまの執念深いほどの愛がなかったならば、イエス様も来られなかったし、聖霊も与えられず、この世界はとくに破滅に向かっていったことでしょう。

神さまのご計画は、今もなお続いています。それは、一人でも多くの人ともう一度つながり、この世界を「愛と平和に満ちた場所」にすることです。現代の世界を見渡すと、悲しいことや辛いこと、理不尽な現実がたくさんあります。それでも神さまはあきらめません。神さまは私たちを造るとき、ご自分に似せて造られました。それは姿かたちのことではなく、神さまの「愛」が、私たちの心に最初からインプットされているということなのです。神さまは、人間にこの世界を「代わりに守り、育ててほしい」と委ねられました。では、私たちは具体的にどのように生きればよいのでしょうか。今日のマタイによる福音書の結びにある、イエス様の命令がヒントになります。「あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にきなさい。」これは、大それた伝道活動をせよという意味だけではありません。今日の第二朗読で、パウロがコリントの教会に伝えたように、「互いに励まし合い、心を一つにし、平和に過ごしなさい」ということです。

私たちがそれぞれの家庭で、職場で、あるいは祈りの中で、互いを大切に思い、傷ついた人をそっと励まし、身近なところに平和を築こうと一歩踏み出すとき。そこにはすでに、父なる神の愛、子なるキリストの恵み、聖霊の交わりという「三位一体の神さま」が生きて働いておられます。こうして、神さまの夢である愛の世界が、私たちの小さな歩みを通して、少しずつ出来上がっていくのです。パウロの手紙の最後には、私たちが礼拝の中でいつも耳にする祝福の言葉が記されています。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。」天地創造の初めから働いておられた神さまは、今もなお、私たちと共におられます。うれしい日も、不安な日も、寂しい日も、神さまは「父」として、「子」として、「聖霊」として、あなたのそばを片時も離れません。

三位一体主日を迎えた今日、人間の理解をはるかに超えた大いなる神さまの愛と恵み、そして交わりの中に生かされていることを深く感謝しましょう。そして、この感謝の喜びを日々の小さな行動へと移し、神さまの愛と平和に満ちた世界を造る「小さなお手伝い」へと、それぞれの場所から共に歩み出してまいりましょう。

父と子と聖霊の御名によって。アーメン。